あぶらむ通信

第23号　2001年12月　　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県吉城郡国府町宇津江
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@kokufu.net
URL http://www.kokkufu.net/~abram/

辻　利彦　作

飛騨便り

多くの希望と期待、夢をもって迎えた2001年でしたが、私たちを取り囲む現実はあまりにも大きく重い諸問題をかかえ、新世紀の幕開けのこの一年を終ろうとしています。私も今の世相同様に重い気持ちをひきずりながらペンを取っています。

「あぶらむ通信」をお手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

今年はあぶらむの会創設15周年、活動の中心となる宿建設10周年という節目の年でした。新世紀を迎えての初仕事ということもあって、あぶらむの会というか、大郷個人というのか、今日ここまでに至る歩みをまとめて、本として出版することにしました。故郷富山を出て40年近く、これまでの個人としての歩み、そしてまたあぶらむの会としての歩みを、それも出版というかたちで一般の人に伝えるわけですから、どのような視点で書けばよいのやら、悪戦苦闘の日々でした。

除雪作業以外は机の前に座りっぱなし、春が近づくころには少しは輪郭がみえてきましたが、私のお尻にも床ずれのようなものができていた。子供のころより机にじっとむかうことができなかった私でしたが、この冬は別人のようでした。人間変れば変わるものなのですね。

あぶらむの会応援のため、原稿料を支払ってまで出版の労をとっていただいた㈱きんのくわがた社、小さな出版社のためなるべく早く「本」としてかたちにしていかなければ資金繰り等も大変。そのご好意に応えるためにも一日も早い脱稿が望まれました。春を迎え田植準備等のあい間をぬっての原稿書き、不思議なめぐりあわせというか2001年5月23日、日本政府がハンセン病訴訟熊本地裁判決の控訴を断念した日に脱稿した。そして7月下旬、あぶらむ物語－人生のよき旅人たちの話－という本になって書店にならぶこととなった。私の知人が言うには「大郷　博　心のヌード写真集」とのこと、読んでいただいて嬉しいような恥ずかしいような不思議な気持です。でもやっぱり読んでいただければ嬉しく思います。

あぶらむ物語出版というかたちで、これまで多大なご支援をいただいた皆様にささやかながらもこれまでの歩みをご報告できたと安堵した矢先、あぶらむの会の将来にとって大きな出来事が舞込んできました。あぶらむの里と地続きの裏山約4町歩（12,000坪、40,000㎡）の土地購入の話です。地主の方の都合により急に売却されるることになり、あぶらむの会に購入意志の打診があった。私としても急な話であり、またあぶらむの里建設と共にそれに伴う借金返済の15年間であったため、新たな土地購入には躊躇したのですが、これも神様からの何かのシグナルと思い買うことに決めました。

神様の計画はどこにあるのか私には未だわかりませんが、私の側の理由としては次のようなことが考えられます。

1．この春、あぶらむの里から徒歩数分のところに大きな温泉施設ができ、県立自然公園宇津江四十八滝と併せ、この周辺がいろんな意味で注目されてきていること。

1．購入した裏山は別荘地等、十分に開発可能な土地であり、もしそのような事になれば、この地の自然と共に、あぶらむの働きにとっても大きな痛手となること。

1．私たちとしては可能な限りこの自然環境を守り、例えもし開発するにしても現在の自然環境との調和を目指していきたい。

1．この数年、立教志木中高校の里山体験学習プログラムを行っているが、裏山の土地

購入は演習林や体験学習の場として、将来的に利用価値が大きいこと。

昔から地続きの土地は借金してでも買えという諺がありますが、次の世代のために環境を整えてやることも私の役割と思っています。

今後は、「あぶらむトラスト」としてこの里山の自然環境を守ることを第一義として、あぶらむの今後の経済活動をもってこの土地購入に用した資金の返済を計って行くと共に、これまでご支援いただいてきた皆様にもご協力いただければ大きな支え、勇気づけです。

さてこれから先は、暗い幕明けとなった新世紀に見る初夢と思ってお読み下さい。私は今、あぶらむの会の新しい働きの一つとして、「この時代にこんな学び場」があってもよいのではと考えています。小さな小さな学び場の創設です。対象は中学卒業者以上で高校卒業資格を求める者で、あぶらむでの宿泊生活を通して、消費一辺倒の時代の中で、ものをつくることの大切さとその中に秘められている知恵と労苦を再発見し、どのような時代状況の中にあっても己が人生旅路をしっかりと歩む人生の良き旅人育てを眼目としています。

具体的には、

☆　希望者はあぶらむで寄宿生活をし、地元斐太高校の通信教育課に入学する。

☆　午前中はあぶらむスタッフと共に学校から提示されてくる課題に取組む。また、あぶらむ独自のカリキュラムを取組む。

☆　現在、あぶらむにはいろんな人材が集まってきています。いろんな面で経験豊かな停年退職されたシルバー人材。人間的にも技術的にも高いものをもっておられる芸術家やアウト・ドアースポーツ関係者。また、農業従事者や土木、建設関係者等々、様々な職域の人間的にも技術的にも有能な人材が沢山連っています。それらの人々を講師として、あぶらむ独自のカリキュラムを組むことができるのです。

☆　座学は午前中だけ、午後は一斉にフィールドへ出ます。

田、畑、山林、木工、建築等々、ここでは様々なものづくりが待っています。お茶をにごしたようなものづくりではなく、しっかりとしたプロの指導のもと、プロに近いようなものづくりをしたいと思います。

☆　しっかりとした指導のもと、商品となるようなものをつくり、そして自分たちでつくったものを自分たちで売りに出かけます。ものづくりとセールス（ビジネス）の勉強が一緒にできます。

☆　自分たちでつくったもので利益が出たならばそれを蓄え、現在あぶらむで行っているネパール・キャンプのようなプログラム参加の積立金にしたり、テントやスキー等アウト・ドアー用品購入の資金とします。

☆　また、現役学生は後輩たちの寄宿舎をつくることができればと夢がふくらみます。

☆　尚、斐太高校の通信教育課は１、２年次は週１回日曜日にスクーリング、３年次に木、日曜日と週２回スクーリングに出れば、３年間で高校卒業資格が得られます。

私たちはこれまで高校中途退学者や不登校生などと生活を共にしてきました。これまでの経験と既存の教育システムを組合せればこんなユニークな学の場がつくれるのです。

現在、日本の学校教育は大きく変わろうとしています。また変わらなければなりませ

ん。しかし、既存の日本の学校はどのように変わって行けばよいのか、その指針を求めてさまよっているのが現状ではないでしょうか。

あぶらむの会が15年間でつくりあげてきた経験や施設、そして多くの人材を組合せれば、これからの時代における新しい学び場のあり方が提示できるような予感がするのです。今度の裏山４町歩の土地購入も、ひょっとすればこのような試みのための神様からのシグナルかもしれないと思う今日このごろです。

「あぶらむ物語」の出版を境に、あぶらむの会は海の潮目のようにはっきりと第二期に入りました。

今後とも私たちの働きを憶えお祈り下さい。皆様方の益々のご理解とご支援を心よりお願い申し上げます。

末筆ながら皆々様のご健康をお祈りいたします。

2001年12月１日

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

お／ね／が／い

「あぶらむトラスト」にご協力いただければ嬉しく思います。

・目的、あぶらむの里地続きの裏山４町歩の自然環境を守るためと山林等の体験学習の場として

・面積　４町歩（12,000坪　40,000m²）

・購入価格　１坪　920円

・協力方法　１坪分以上お願いいたします。

お／知／ら／せ

○2002年　第７回子供から大人までのネパールの旅　参加者募集

期間　2002年３月25日～４月５日

お問合せ　あぶらむの会

○メール・アドレス、ホーム・ページ変更のお知らせ

新メール・アドレス　abram@kokufu.net

新ホーム・ページ　http://www.kokufu.net/~abram/

○あぶらむ物語――人生のよき旅人たちの話

著　　者　　大　郷　　博

出 版 社　　㈱きんのくわがた社

Tel　03－5215－2298

コードNo.　ISBN　4－87770－065－XC0095

定　　価　　1,800円＋税

お近くの書店で（あぶらむにもあります）

特別寄稿

石川文洋（カメラマン）

“あぶらむの里”をつくることは大郷博さんの夢であったと思います。おかげさまで私たちも宿から外の風景を眺めながら旨い酒を飲むという楽しい時間を過すことができます。自分の夢が他の人の幸福にも結びつくのは本当に素晴らしいと思います。“あぶらむの里”を訪れ充実した時間を過しているうちにその人にも新たな夢が生れてくるかもしれません。

“あぶらむの里”は博さんが持つ多くの夢のうちのひとつでしょう。夢の実現までには妻の育さんと４人のお子さんの支援、声援、それに友人たちの協力も大きな励ましとなったことと思います。

“あぶらむの里”が誕生するまでの過程は大郷さんの本“あぶらむ物語”に詳しく書かれています。訪ねてきた人々が心を休め明日からの活動のエネルギーを蓄える。人生のなかで悩み迷いが生じた時、一呼吸を置いて考え直す。“あぶらむの里”をそのような場所にしたいという大郷さんの気持ちが“あぶらむ物語”から伝わってきます。

実際に“宿”でくつろいでいる人を眺めていると一応、大郷さんの目的は達することができたのではないかと感じました。さらに夢を広げるためにどのようにするのだろうと期待していたら、大郷さんが学校をつくろうとしていることを知り成程と納得すると同時に嬉しくなりました。

誰もが良い人生を過ごしたいと一生懸命になっています。良い人生とは何でしょうか。私は「夢を持って生きること、少しでも人の役に立てること」と考えています。様々な形で人の役に立つことはいろいろとあるでしょう。

人類の発展に貢献するような発明、発見をする学者、医師、弁護士、政治家など立派な仕事をして注目を集めている人がいます。しかし、職業に上下はなく目立たなくても他人の役に立っている人は大勢います。

友だちが喜ぶ時は共に喜び、悲しんでいる時は一緒に悲しみ慰めてあげる。相手の気持を理解できる心を持った子どもは友だちの役に立っていると言えると思います。

床屋さんでもお客さんが気に入る調髪をして、その人が喜んでくれたら立派な仕事をしたことになります。私は大学へは行かずカメラマンになりましたが、この仕事を選んで良かったと思っています。世界や日本の各地を回っている時、人助けになる仕事をしている人々と出会いました。例えば、私がベトナムに住んでいた頃サイゴンの中央市場近くの路上で靴の修理をしていた中年の男性。はがれた靴底を直してもらった時、実にていねいな仕事をし踵だけでなくほかの痛んでいる先の部分も縫ってくれた。しかも良心的な値段でした。その人の前にいると心の安らぎを感じるので時々、靴を磨いてもらいに行きました。

千葉県の市川市に住んでいた時、近所のラーメン屋さんをよく利用しました。店主がひとりだけの店でいつも客は少ない。店主が無口のせいだったかもしれません。しかし、餃子とラーメンが大変旨く、餃子を肴にしてゆっくりとビールを飲み、後でラーメンを食べるとお腹にも精神的にも満足した気分になりました。その店へ行くと一日の疲れが

とれました。

官官接待を受けて喜んでいるエリート官僚より、私はこのラーメン屋さん、靴直しのおじさんを尊敬します。どんな仕事でも誠実に打ち込んでいる姿は素晴らしい。靴屋さん、ラーメン店主に限らずそのような人に育つような学校だと良いなあと思っています。

夢は持ち続ければ必ず実現すると私は信じています。しかし、夢は歳月が流れるにしたがって変ることがあります。変っても良いのです。そのかわり次の夢を大切にする。夢を持っていればつらいことにも耐えられるのではないでしょうか。

私自身の夢について少し話しをさせて下さい。故郷の沖縄を後にして両親、兄、弟と一緒に千葉県船橋市の振興住宅地に移り住んでいました。父は沖縄では少し名の知れた小説家だったようですが、本土では小説が売れず、私たちは一家は極端な貧乏生活をしていました。

父と兄は七、八百戸ぐらいあった住宅地の新聞配達をして生計をたてていましたが、私も中学在学の２年間は百戸ぐらい配達を担当しました。本が好きだったので、友だちや配達先のおじさんおばさんから少年少女文学全集、少年雑誌などを借りて夢中になって読みました。

「フランダースの犬」「ああ無情」「岩窟王」「鉄仮面」などを読みながら涙を流したり、胸をハラハラドキドキさせたことを覚えています。なかでもリビングストン、キャプテン・クック、アムンゼンとスコットといった人々のアフリカ、大航海時代、南極などの探検・冒険物語りが大好きでした。

新聞配達でもらったお小遣いをためて、当時の中学、高校生で私ほど映画を見たものはいないだろうと自称していますが、アメリカ映画で写しだされた大きな応接室、いくつもの寝室、冷蔵庫のあるキッチン、といった豊かな生活に憧れてアメリカへ行きたいという気持になりました。遠いアフリカ、アメリカへ夢を馳せらせながら雨の日、雪の日一軒一軒、新聞を配りました。だから新聞配達をつらいと思ったことはありませんでした。

中学生時代では水田、小川での魚とり、森で栗を拾い、木に登って椋の実をとり、畑でヤンマを追いかけるという自然の中で遊んだことも楽しい思い出です。だから今、外国へ行った時どのような環境で子どもたちが育っているか関心を持って見ています。

小、中学校生の時の貧困生活が私にはプラスとなっています。当時はテレビのない時代だったのでベーゴマ、メンコ、クギ倒し、ビー玉などで仲間たちと遊び、豆鉄砲、竹馬、竹トンボなどもつくりました。

高校は都立の定時制へ行きました。当時は日本の経済力が低く就職する中学生が多かったのです。私のいたクラス42名のうち高校へ進学した生徒は17名だったそうです。定時制は私一人でした。

1969年、東京都の全日制高校が140校で生徒数154,747名に対し、定時制は110校、生徒数54,571名で全日制の三分の一もの生徒がいたのです。私の通っていた両国高校では57年の定時制の卒業生、３クラスで155名。私のクラスは51名が卒業しています。定時制の実体も現在とは違っていました。

定時制へ行って本当に良かったと思っています。昼間は毎日新聞社で事務補助員として働いたので、全日制の生徒にはできない体験をしてその分、得をしたという気持でい

ます。定時制の生徒たちは、自営業、家庭の経済事情など共通した点を持っていたので連帯感がありいじめなど想像もつきませんでした。クラブ活動、文化祭、体育祭、ハイキング、修学旅行など楽しい思い出がいっぱい残っています。

良い仲間にも恵まれました。現在、私も含めて８名が時々、集まって酒を飲んでいますが、生涯の友人と考えています。一昨年は家族も含め23名でベトナム旅行をしました。とても楽しい旅でした。今年はアンコールワットへ行く予定でしたが残念ながら同時多発テロが起こったので参加者の家族の中から心配する声があり来年に延期しました。将来は、ラオス、ミャンマー、ヴェネツィアなども行こうと話し合っています。

高校の時も相変わらずの貧困生活でしたが、やはりそのことがいろいろな点でプラスとなりました。みんなで少しずつお金を出し合って焼酎を飲んだり、馬肉鍋をつついたことも友情の絆を強くしたことに結びついています。

高校生になるまで“餃子”を見たことも聞いたこともなくカノコと読んで笑われたことを覚えています。初めて食べたスパゲティナポリタン、カツライス。その時のひとつひとつの状況は今でも忘れることができません。食物に好き嫌いはなく何でも旨いと食べることができるのは人生にとって得なことです。お蔭で外国で９年近く生活しても小さな安い食堂で満足することができました。

高校時代も映画を見続け将来は無料で映画を見ることのできる映画評論家になりたいという夢を持っていました。しかし、大学受験が不合格となり予備校へ行き毎日新聞社の図書室で受験勉強をしている時に、毎日映画社でニュースカメラマン助手として入社する道のあることを知り、映画評論家の夢か、ずいぶん迷った結果、カメラマン助手を選びました。

カメラマン助手を続けているうちに映画評論家ではなく一人前のカメラマンになりたいという希望に変ってきました。カメラマンに同行し60年安保闘争ほか、毎日いろいろな現場取材を体験しました。重い脚立、照明を持ち、全学連と警官との闘争の中をもっと敏捷に動けとカメラマンに怒鳴られながら走り回りました。

しかし、つらい、やめたい、進学していれば良かったと後悔したことはいちどもありません。給料をもらいながら一人前のカメラマンになるため修業していると考えれば職場は学校であり恐い先輩カメラリマンも先生に思えました。大学では得ることのできない貴重な体験もしました。

当時の先輩の一人、土屋哉彦さんは現在、千葉県市川市の南行徳で牛タンの店「へそまがり」を営業していますが、つい先日も店を訪ねその頃の話しをして楽しい時間を過しました。映画社に約４年勤め新米カメラマンとして時々、テレビニュースの撮影をするようになった頃、次第にアメリカに行きたいという気持が強まってきました。中学校時代の夢が甦ってきたのです。

アメリカでテレビ局のカメラマンになることができれば理想的だが、初めからそれが無理であれば便所掃除でも皿洗いでもしてまず英語を覚えようと考えました。

沖縄からオランダ船に無理に乗せてもらい初めの寄港地、香港に着きました。懐には27ドルしかないので仕事を見つけないと住むことも食べることもできなくなります。ＹＭＣＡに泊って職探しをしました。毎日新聞社の香港特派員、江藤数馬さんの紹介で海外トラベルサービスという日本人のいる旅行社で１ヶ月ぐらい日本人旅行者案内の手

伝いをした。すると旅行社の人が広告会社で働くオーストラリア人を紹介してくれた。私に撮影技術があることを知るとそのオーストラリア人がヒルトンホテルでスタジオを営むアメリカ人のところへ行くように教えてくれました。

私は英語が分らないので旅行社の英語の達人、浮橋恒彦さんと一緒に行ってもらった。ちょうどアメリカの大女優ジュディー・ガーランドが香港に来ていたのでテレビニュースとして撮影してみなさいと言われ、撮影して編集までするとすぐ採用が決まった。アパートのある九龍からフェリーに乗って香港島のヒルトンホテルまで毎日通勤しました。日本人は私一人で社長のほかはオーストラリア人マネージャーと中国人スタッフだった。全員が英語で話していたのですぐに慣れて仕事上で意志の疎通に不便は感じませんでした。

香港での８ヶ月は夢のようでした。私にとって初めての外国、外国人たちとの仕事、退社後、毎日のように香港散策。マカオでの撮影。スタジオの仕事で二度、ベトナムへ行き、タイも取材しました。香港滞在中にアメリカへ飛行機で行けるだけの預金ができたのですが、そのお金で16ミリの撮影機を買って香港からベトナムに移住しました。そして、ベトナムで４年間、生活をした後、日本に帰り朝日新聞社に勤めたのです。新聞社も15年勤めて退社をして今はどこにも所属しないフリーカメラマンです。

これまでのことを説明したのは、学校の成績、大学進学に関係なく自分の考え方で人生を創造できると言いたかったからです。人生は白いカンバスに描く絵のようにその人の気持次第でいろいろな表現ができると思っています。大郷さんも学校を創造的な人生ができるような人を育てる場にしようと考えていると思います。

私の夢は変わりながらもひとつひとつ実現しています。地球一周90日間の船旅に参加して世界一周旅行を果しました。アメリカへ住むという気持はなくなりましたが、サンフランシスコからニューヨークまで１ヶ月間のバス旅行をしました。世界一大きなベトナム戦争写真集も出版することができました。ホーチミン市戦争証跡博物館に私の写真常設場も設営されています。都市から離れて自然豊かな場所に住みたいという長年の夢も100パーセント満足できる場所とはいえないながらも果たすことができました。いま、諏訪湖、穂高連峰を眺めて生活しています。今後は沖縄に常設写真館を建てたいという夢があります。日本を徒歩縦断したいとも思っているし、そのうち又、次の夢が生じてくるでしょう。

これまでの人生のなかで多くの失敗、失望もありましたが、総合的にこれで良かったと思っています。その理由は定時制通学、カメラマン助手、無職旅行出発、ベトナム移住、新聞社退社などの選択にあったと考えています。活動をする時、自分の気持に逆らわない。選んだ道で一生懸命に頑張れば次の希望が生じるという思いが基準となりました。

又、これまでを振り返ると多くの人々の支援、友情によって仕事ができ精神的安定を得てきたと思っています。

大郷さんがこれからつくる学校は本当に楽しみです。木工機械を使って何かを造っている。周囲の豊かな自然の中で小鳥の声、風の囁きに耳をかたむけている。講師の話しを熱心に聞いている。生徒たちの語り合い。じっと読書をしている。そういった生徒の姿が目に浮かんできます。どうぞ頑張って下さい。

森の中の学校（リシヴァリースクール）訪問記

私立高校教諭　永　原　孝　雄

けたたましく聞こえてくる鳥の鳴き声で目を覚まし、ベットの中でうとうとしていると玄関に足音が聞こえ、ドアをあけてみると熱いチャイの入ったポットがそっと置かれていました。私が訪れた南インドの森の中にある学校での一日は、そのチャイを飲むことから始まりました。12月の南インドはちょうど日本の５月のような気候で温度も低く、朝の空気はひんやりと透き通って気持ちのいいものでした。

リシヴァリースクールは、インドのシリコンバレーといわれているハイテク都市、バンガロールから北東に135キロ、最も近い町マダンナパリから17キロ離れたリシヴァリー（賢者の谷）の深い森の中にあります。谷全体が学校の敷地になっており、森の中に校舎、寄宿舎、食堂、ホールなどが点在し、それを取り囲むように野菜畑、田園、牧場、マンゴー畑が広がっています。この学校は、宗教的思想家クリシュナムルティーによって開かれ、４年生から12年生まで約350人の生徒たちが50人の先生と生活をともにしながら学んでいます。

一日の生活は、薄暗いうちに起きて軽いランニングやボール遊びで始まり、その後朝食となります。野菜中心の食事と牧場でとれた搾りたての牛乳が出ます。朝食の後はホールで朝会が開かれます。私が滞在していた間の朝会は、サンスクリットの朗誦（礼拝に似た雰囲気）と先生が自分の得意分野に関して話をするというプログラムでした。三々五々ホールに集まって来た生徒はそれぞれ思い思いの場所に座ります。低学年は床に直接座り、それを囲むように上級生、先生、そして先生の家族が席に着きます。まずここで驚かされたことは、その空気は決して緊張したものではなく自然体で柔らかなものでした。静かになる頃を見計らって台の上に座った上級生が朗誦を始めるとそれに合わせて全員が歌い始めます。ドアのない開かれたホールの周りは緑一色、鳥の鳴き声が混ざった全員の声はとても心地よく耳に響きました。歌い終ってしばらくは静寂が訪れます。しばらくしてホールの隅に座っていた校長先生が立ち上がると、それを合図のように全員がすっと立って解散となります。この間ざわついた感じが全くありません。

このように充実した時間を勉強が始まる前にもてる生活と、そのような環境の中で子どもたちがどのようなことを考え、感じながら学んでいるのか、ということに興味が湧いてきました。

授業は午前中にまず２時間、その後ジュースブレイクがあり、学校の果樹園でとれたフレッシュジュースが出ます。先生たちもこの時間に教員室に集まり、ゆっくりとお茶を飲みます。私は訪れた初日から職員室に行きましたが、まるで違和感がなく、普通に接してくる態度と開かれた雰囲気に驚かされました。その後２時間の授業があり、昼食となります。昼食の後１時間以上の休みがありそれから午後の授業。そしてティーブレイク、このときは手作りのクッキーがおやつとして出されます。

放課後はスポーツ、ダンス、散歩と自由にすごし、夕食となります。夕食後、下級生は自分の寄宿舎で友達と遊び、上級生は図書館で読書や勉強をして、10時には就寝となります。

滞在して４～５日過ぎた頃、理科の授業を見せてもらう機会を持つことができました。私は期待に胸をふくらませて教室に入っていきました。ちょうど、モーターの原理について扱っていました。生徒にとって一番理解しにくいところです。どの様な展開で進んでいくのかとても興味がありました。先生は、黒板に向かって丁寧にモーターの図を書き始めました。コイル、磁石、ブラシ、電流の流れる向き…それは教科書に印刷されたようにきれいで丁寧な図でした。図が書き終わって、これからどのように説明するのかと思っていると、ちょうどそこで鐘が鳴って授業が終わりました。この間、生徒は黒板

に書かれた図を熱心にノートに書き写すだけでした。

美術、数学、物理とそのほかいろいろな授業を見学しましたが、特別な授業が展開されるわけではなく、ごく普通の授業でした。私は、職業柄授業の参考になるものがあるのではないかと期待を持っていたのですが、そのようなものは何もありませんでした。

上級生の物理の教科書を見せてもらいましたが、日本のレベルより遥かに高く大学二年程度の内容でした。私は生徒と一緒にロケットの実験をやらせてもらいましたが、原理について質問したところ、その答えはとても理論的であり、自分の考えをきちんと説明してくれました。

また、放課後上級生数人に集まってもらい、「平和」と言うテーマでインタビューをした時、マイクを向けるとためらうことなく、自分の考えをきちんと熱心に話す姿にも驚かされました。ちなみにリシヴァリースクールからの大学入学者は、インドでは上位に位置するということでした。

私が見た授業と、生徒の持っている学力、雰囲気、話す内容のギャップがどうしてもうまくつながらないのです。日がたつにつれて、私が今まで持っていた価値観でこの学校を見ている限り何も見えてこないことに気づくようになってきました。

授業の方法や内容がどうのこのうという前に、リシヴァリーでは教育のもっと本質的なことが実現されているように思えてきたのです。教師と生徒が一緒に生活する中でお互いの信頼関係を築くことが基本にあり、その合間に授業をやっている。そういうことが分かってきました。

教師一人に対して生徒七人という比率が守られているというのもそういうことを重要視しているからなのです。教師が数人の生徒を相手に大きな木の下でゆったりと、しかし、真剣に授業を行っている姿もよく見かけました。競争原理に基づかないということから上級生になるまで試験はなく、成績を上げるために賞や罰を与えることもないということも知りました。

日の出前に起床し、夜も比較的早い時間に就寝する規則正しい生活、親切な自然素材中心の食生活といった基本的な生活のリズムが守られていることもこの学校の特徴であり、それは決して規則で強制されたものではなく、自然のサイクルが子供たちの身体の中に当たり前のように根付いているからだというように思いました。このような生活の中で本当の「ゆとり」が生まれ、それが子どもと教師の満ち足りた表情を作っていたのです。

教師は教員免許を持った人は少なく、校長先生は数学の研究者、そして元銀行員、哲学の研究者と多様性に富んでいます。共通している点は、クリシュナムルティーに惹かれているということだけです。しかし、学校の中に彼の写真や言葉はどこにも掲げられていません。ここでクリシュナムルティーについて詳しく述べる力は私にはありませんが、彼の言葉の中に「十分なゆとりの時間があってはじめて教師は本来の姿を発揮できる。なぜなら、そうしたゆとりある時間こそ自分自身について学ぶ精神状態になれる」というのがあります。この学校で一番強く感じたことは、このことが、教師にも子どもたちにも実現されているということでした。

それは、生徒自身が自分を見つめ、自ら学ぶ姿勢を身につけ、自分の考えをきちんと話すことができるということからも分かります。

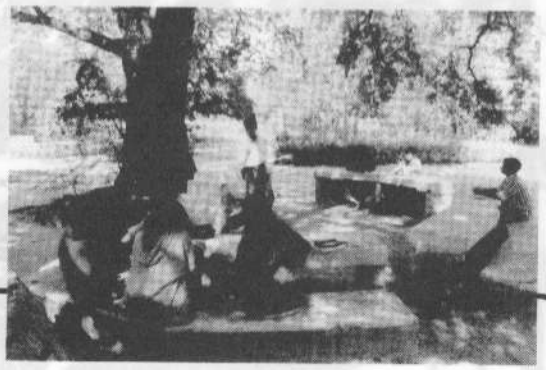
ここでいう「ゆとり」は、現在日本の教育でいわれている「ゆとり」とは、本質的に違うもののように思います。

このような学校が先進国といわれるヨーロッパやアメリカ、日本といった国ではなく、貧しい国の一つといわれているインドに実在し、そこで豊かな教育が行われていることに驚かされるとともに、教育に携るものとしてなにか大きな光を見いだしたような気がしています。

2001年あぶらむこの一年

1月・一度は見ておきたい世界の旅、ペルーインカ遺跡の旅
　・「あぶらむ物語」出筆開始
2月・今年の寒さや雪は平年並（屋根の雪降し各棟１回）
3月・第６回子供から大人までのネパールの旅
4月・高山日赤看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
　・ＪＡ岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
　・第７回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
5月・「ネパールの響き」バンスリ（竹笛）コンサートイン飛騨
　インドラ・グルンのバンスリコンサート
　・14日　田植　　山菜とり、キャラブキづくり
　・高山日赤看護専門学校２年生研修会
6月・ゲシュタルト・セラピー研修会　　いちご、ブルーベリー、玉ねぎ収穫
　・「あぶらむ物語」脱稿
7月・韓国大韓聖公会あぶらむ訪問団来里　７月末より　じゃがいも収穫　夏野菜収穫
　・13日　裏山４町歩の売買の件話し合い
　・26日　あぶらむ物語完成、一般書店へ
8月・各教会夏期キャンプ　　トウモロコシ、アスパラガス、枝豆収穫
　・立教志木中高校里山体験プログラム（３泊４日）
　・あぶらえの里　自然体験プログラム「山から山へ」（３泊４日）
9月・高山日赤病院看護部研修会
　・日本熱傷協会研修会
　・沖縄愛楽園訪問（あぶらむ物語出版報告）
　・９日　稲刈り　　23日　脱穀
10月・２日より神戸国際大学チャペル家具製作開始（2002年２月末まで）
　・「山の鼓動、森の囁き」－フィリピン山岳少数民族の唄と竹の楽器コンサート
　あぶらえ収穫
11月・１日　諸魂庵　逝去者記念式　　味噌用大豆収穫
　・沖縄県人会集い
　・第１回サバニ・プロジェクトの集い
　・27日　初雪　越冬準備開始
12月・あぶらむ通信発行
　長ねぎ、白菜、大根収穫
　・22日　あぶらむクリスマス会

※2002年　どうぞよいお年をお迎え下さい。



あとがき

あぶらむ通信に特別寄稿して下さった石川文洋さんと永原孝雄さんに心より感謝します。お二人の熱いおもいが満ち溢れ、写真やカットのないものとなりました。でも、どうしてもお届けしたい写真があります。リシヴァリースクール、樹の下での授業風景です。学ぶことの豊かさが伝わってくるようです。

2002年、どうぞよいお年でありますよう、お祈りいたします。　　大　郷

寄付者一覧（'00年12月1日～'01年11月30日）

太田義明／菊池栄三／東京聖テモテ教会奉仕会／木村富昭・秀子／森田トミ／祈りの家教会／磯貝澄美子／東野光男／村守恵子／松本信代／富山聖マリア教会／畑井正春／宮城正男・正子／市川聖マリヤ教会／朝比奈誼／高島富美江／佃寿子／佐口哲／財満研三郎・由美子／松井明子／日白聖公会／小野成子／京都復活教会／一柳百／千葉復活教会／片岡剛／高瀬留美／小野翠／小笠原スワ／本間勇吉／河野マリ子／工藤真喜子／福岡女学院中学校・高等学校／片桐孝・多恵子／中部学院大学・短期大学部宗教委員会／金子美祢子／山崎俊樹／佐々木亜子・福留史郎／吉田孝宏／大嶺佐智子／甲藤善彦・光江／本間太樹／外村民彦／松島理恵／嘉手苅米子／大城恵子／山城タケ／新倉俊吾・久乃／紅林みつ子／牛丸忠男・久里／松村昭子／加倉井佳子／久田広子／坂本吉弘／箕浦純子／熊谷一綱／佐藤六郎／斉藤洋明・和田恵子／小林賢三・佳子／大城豊次／大韓聖公会あぶらむ訪問団／古田昌人／今関公雄／西平直／岐阜聖パウロ教会／炭竈英子／畑野栄一・寿子／ブラザー佐藤／青野てい子／石神耕太郎／西川健二／石地豊蔵／斉藤恵美子／園部勝・千恵子

新規会員（'01年11月30日現在）

士師晴子／床尾美子／大槻カズ子／本村真／畑中幸次郎／ジーン・レーマン・銅直幸子／音川美智代／小林聡／忍昭弘・美恵子／中垣卓子／高木暢子／鈴木恵一・裕子／内田孝／矢野一郎／梅沢栄・雪子／佐藤敏子／芝田美佐子／松下かずこ／勝部幸子／竹林徳子／柳原信／佐藤芳恵／高岸裕喜子／山田日出夫／鷹見安浩

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。